

Yusuhara a Home from Home (第 30 部)

さようなら、梶原 (A Final Hello and Goodbye)

梶原学園 ALT : スティーヴン・ウダード

お別れの時がやってきました。これが、僕が書く最後の学園だよりになります。この地を去らなければならないことはわかっています。伝えたいことも決めています。そうであっても、机の前に座っていざ言葉をつづろうにも気持ちの整理がつかず、ちょっと無理なのではないかとも思えます……さよならを言わねばならないこと、そして、思い返すたびに涙があふれてしまうような思い出を、ここに残していかなければならないことを考えると、正直、やりきれません。

僕は5年間、梶原で暮らしました。人生の1/6をここで過ごしたことになりますが、この地での生活がもうすぐ終わるとは、信じられない気持ちです。7月下旬にイギリスに帰国しますが、ここで少し、この5年を振り返ってみたいと思います。これほど長い時間、梶原に住むことになるなんて！そして、この町のことをこんなに大好きになるなんて！全く想像できませんでした。赴任地がこの町だとわかった時、インターネットで検索してみたのですが、その当時、英語で調べられる梶原についての情報はほとんどなかったのです。ですからちょっと緊張したのですが、それでも不安になるほどではありませんでした。その時の僕は正しかったと思います。この町は、ひょっとしたら世界でも一番すてきな場所なのかもしれないと、今では考えているのですから。5年という年月のあいだに、この町が置かれた状況は変わりました。今ではさまざまな情報があふれていますし、観光で訪れる人の数が増加していることからわかるように、梶原のことを知っている人の数も増えつつあります。

僕は何よりもまず梶原学園のALTとして、この町で暮らしました。学校という組織だけでなく、子どもたち、先生方、保護者のみなさんが親切に、そして敬意をもって僕に接してくださったことに心から感謝しています。下は子ども園の、今年の年少組さんから、上は大学2年生か、またはもう立派に働いている卒業生のみなさんに至るまで、僕と一緒に英語を学んでいる・学んだ子どもたちが、どれほどかけがえのない存在だったか……言葉では言いあらわせません。その一人一人との英語の学びは、この5年間ずっと、僕の喜びであり続けました。中には、もうさよならも言えないままになる子たちも少なからずいるのが、僕としては本当に心残りです。みんなのことが、本当に大好きでした。それから、地域のみなさん。いつでも僕を支え、温かく接してくださいました。必要な時には必ず助けてくださいましたし、僕とおしゃべりをするのに足を止めては、他国の文化について知ろうとされていたように思います。

僕はこの学園だよりの題名を、“Yusuhara a Home from Home”(故郷から離れたもうひとつの故郷、梶原)と名付けました。初めてこの町に着いた時、これから待っている暮らしや時間に向けて、自身の思いを何か託したいと考えたからです。ですが……それが終わりにさしかかっている今となつては、あまりしっくり来ません。今、この町について抱いている僕の思いを、正確には表していないように感じるからです。梶原は、もはや「もうひとつの故郷」なんかではありません。僕の故郷そのもののなのです。この5年間、僕に



雲の上の町、梶原。ここは僕が世界で一番好きな場所です！

とっての我が家であり続け、そして幸せにすごすことができた場所なのです。豊かな自然から聞こえる音。目に映る色。鼻に感じる香り。夕方や週末に、庭に座りながら、家のすぐそばを流れる川を眺める時の穏やかな風景。散策しながら、梶原という土地を感じる事……そのどれもが、毎日の生活に安らぎを与えてくれました。僕は間違いなく、ここでの生活を懐かしく振り返ることでしょう。今から帰国するまでの数週間、もし僕を見かけたら、どうか声をかけてください。残された時間を、楽しい思い出でいっぱいになりたいからです。その時、もし僕が取り乱してしまったとしても、どうか許してください。あふれる思いをこらえるのは、何よりも難しいことなのですから……。

一緒に英語を勉強したみなさん。先生方。学園のその他のスタッフや教育委員会のみなさん。保護者のみなさん。役場職員の方。その他、この町に住むすべての方々へ、心からのお礼を言わせてください。みなさんのことを、僕は決して忘れません。いつまでもこの町で、幸せに暮らしたかったです。去りがたい思いは、今も変わりません。本当にありがとうございました！

—スティーヴン・レズリー・エドワード・ウダード、2019～2024年の梶原学園 ALT。

(日本語訳：町 ALT 森竹弘喜)